

フリースクールにおける発達障害児に対する音楽の効果

The effect of music for child with developmental disabilities in free school

館村 司 (Tsukasa Tatemura) 指導：菅野 純

本研究の目的

日常にはさまざまな音が氾濫しており、そもそもどんな音も、その一つひとつは単なる物理的な空気の振動、密度の変化に過ぎない。ところが人間は、音楽を一つのまとまり（ゲシュタルト心理学の原理）として捉えることにより、いろいろな心理的变化がもたらされる。

物理学において「ゆらぎ」とは、質点に加わる力が、大きさ、向きともに不規則に変動している状態のことをいい、ランダムで規則性がない音と、規則正しい単調な音との中間の音、「1/fゆらぎ」が心身をリラックスさせ、健康の回復や向上に効果的であることがわかってきた。

本研究では、音楽教育、とりわけ音楽を活用したセッションが、その音楽という専門性、特殊性を生かして障害児のニーズにどのように応えられるか、そして発達障害児の通関するフリースクールにおいて、どのような取り組みが可能で、どのような効果、影響がもたらされるかを研究の目的とした。

事例（実験協力者）の概要

本研究の対象者（実験協力者）は、特別支援学級中学1年生男子（13歳）1名である。3歳のときに発達障害との診断を受け、このときからてんかんの処方を受けている。小学校は普通学級に通学するが、だいぶいじめなどにもあったとのこと。現在、療育手帳（みどりの手帳）の交付を受けており、知的障害のランクは中度Bとの判定を受けている。父親、母親との3人家族である。

見立て

比較的体は小さく、表情が乏しい。口数は多いほうではなく、話し方も幼い。またあまり声に抑揚が感じられない。算数の繰り上がり、繰り下がりや、時計の読み方の理解も不十分で小学校低学年の学習レベルである。

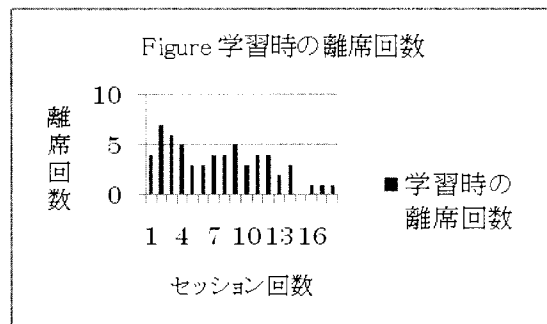
分析方法

事例研究法（記述的な方法を主としつつ研究する質的な分析方法）に基づき、対象者とできるだけ自然なやり取りの中で調査を進め、対象を変数に還元するのではなく、全体的に見ていくことによって、時間的な推移や出来事の背

景を考察する。また、音楽セッションにおいては、6回分のセッションをビデオ撮影により記録し、その記録データを検証した。

考察（行動観察の結果から）

実質的な音楽セッションは2008年7月5日より開始し、全18回のセッションを行った。表情・感情の表出度、学習時の非集中度、学習時の離席回数、学習時間について記録を取り、検証した結果、回を重ねる毎に音楽セッションの効果が現れ、有効に機能したと考えられる結果が得られた。（Figureでは、セッションの回数が重なるごとに、離席回数が減少し、集中度が増加していることがうかがえる結果となっている。）



まとめ

この音楽セッションにより、きちんと挨拶ができるようになり（対人関係能力の向上）、集中力が高まり（情緒の安定、意欲の向上）、声を出して笑い（感情表出の増加）、音楽に合わせて楽しそうに体を動かす（運動能力の向上）などの効果を確認することができた。